



新古今和歌集鈔
三

特別
イ 4
3163
101(3)



貴
14
3163
101(8)



新古今和歌集新鈔

雜字上

藤原有家朝臣

○山法やさらそむきよはなをきよきよはなをの村浦
山法は書とありきよをよるは侍けりけりありて文字
書のうちくはをきよらむといふむたあありけり悪
人のとあるは侍らむままは一天四海の中をといひ
ままを侍らむままの書乃むら清い人のといひ
あり法のいふは侍らむらむとまされむらむらむら
たつて侍らむと侍らむらむらむらむらむらむらむら
よまのまらむらむらむらむらむらむらむらむらむら



新古今和歌集

年月をさぐるまゝあはれゆくことなり

菅原大政大臣

●みちの杉本の御まねいあはれむとまのたれする
 又まのた遷の心なり杉本をせんさすう杉本をそそ
 ましつゝまのたれんうのたのこゆつこくを
 さよたえそそましつゝあまよつけくたよ
 のよしつゝまのたれんうのたのこゆつこくを
 杉本の御まねいあはれむとまのたれする
 大江注房はをそそりて
 川 注本のトハくつとていあへの 如本

定家

○まのたつてんゆきにあはれむとまのたれする

まのたつてんゆきにあはれむとまのたれする
 又まのたつてんゆきにあはれむとまのたれする
 まのたつてんゆきにあはれむとまのたれする
 先祖のまのたつてんゆきにあはれむとまのたれする
 の御まねいあはれむとまのたれする
 はく老果ゆつこくまのたつてんゆきにあはれむとまのたれする
 孫くつこくまのたつてんゆきにあはれむとまのたれする

義原雅経

のたつてんゆきにあはれむとまのたれする
 又まのたつてんゆきにあはれむとまのたれする
 まのたつてんゆきにあはれむとまのたれする
 まのたつてんゆきにあはれむとまのたれする
 まのたつてんゆきにあはれむとまのたれする

梅一極さや一時はあつてはゆるれくあつたのこゝく書けりますてくらまれよけり
まなとくら出くくらゆるけりは初事ゆくと
しりされどもあつ川といつらあがしきとくらじ
と云かりましよはけらうらの花をえゆるよ
方の老花とくらくらとまよ花一てま
けきつらよまれよりさだよ花のうれせくら
なりあれくら一くらをむくらとくら
つめ我いあらくらくら花よま一くら
とひのくらくらくらくらとあけくら
とのくらくらくらくらよひあらくら
あつゆるくらくらくらくらくらくら

梅一極

いよ初也

源仲光

○いよ初也月日のゆくもあつたはものまをくらくら
いよ初也いよ初也いよ初也いよ初也
と云初也いよ初也いよ初也いよ初也
と云初也いよ初也いよ初也いよ初也
と云初也いよ初也いよ初也いよ初也

和泉式部

○おのそれあつらふはあつてはけり
おの人のそれあつらふはあつてはけり
おの人のそれあつらふはあつてはけり
おの人のそれあつらふはあつてはけり
おの人のそれあつらふはあつてはけり

新古今

大納言忠家

○横をたそひしはむかひぬよりぬ半くまるといへり

後冷泉院御時ありて、教新成栴花といつらあり
をたのこともつらうあつりけりといふともさう
あり新成栴花の作むのころ世のさあけり
やうなまこととちらぬとて、地をさるるといへり

経伝

○何れもまを雲のうはちうらぬ花あがるとい

同都也又まのふら作むくもあまあまのむも
まよままのふらとてまをさるるといへり
ぬを冷よえむといふなり

大納言忠家

○横をたそひしはむかひぬよりぬ半くまるといへり

凡のちやあせといふ春平の内をうらむなり

奥端鏡屋長松樹忽取風聲作雨聲 昔唐母

く、本氏とて人紀とて、さうりて、ぬらう精也

後成

○雪月を雲のうはちうらぬ半くまるといへり

世同よひうりのあつらひの二月の二也月はとあま
らうて地の世界とて、まをさるるといへり
まよままのふらとて、まをさるるといへり
まよままのふらとて、まをさるるといへり

燕園

○さかやまのふらとて、まをさるるといへり

抄改及下らしむらうくも世の地を越下りよを
ししせなさとゆねをさしゆかなく人しは
取下は信正の物又はくゆしよ

同

○日本の方をむしむるもあはれも縁さうれしりのも
世はあつし一討むれの方よめそしと人今ねり人
うしとあり二しとよ方を控くくぬきいむしと着
しとふゆくしと考は不滅十二因縁をれ心裏に
ゆつとありとちやうむと云も世の心とありし
あつあれしとむの縁はしひ控さう河也事通
事いそ死の匂いもさすあつらり
ふとあつあれのさあつの橋をさしとありしとあり也

日本の月ほくねりしあつわらせさうしりきさし
ゆしと今いはしとむしと男のゆんときりは
しとよを極の通心考めり也惟る歎きさうしと
ゆりねりんとあつらりしとありしとありしと

加頭たはつ

○ねかつれ震らるんしけらゆのねのさりらまのねり月
まのねり月ししとねらるよかりしわたの陽を
さう月しりりりゆんさう真の身とさう
ねりしとありしとありしとありしとありしと

引合
武隅のねしと人をいふとさうとさうとありし
たげとありしとありしとありしとありしと

たきよめ松このひ移りなりとせよても我はなほえ

法師 奉清

○日といふ所のさりもあつたふのれもあつて
よこきといらくもをさつとらをくもあつて
くのちこつていもあつていりなりりといふ

大納言 忠良

○およあつてもさすふあつた也田のさりのゆきさのさ
さ今序よさくよさくく壇をさりていり
あつてはそれなりとていりささるいり
ささるはさすふあつたりといふ

有家

○あつてのさすふあつたのゆきさのさりのゆきさのさ

まゐのさすものさつひとあつていりさす
さすのさすもあつたさつひとあつていりさす
あつてはそれなりとていりささるいり
ささるはさすふあつたりといふ

八條前太政大臣

しんりんのものさすはあつたさつひとあつていりさす
あつてはそれなりとていりささるいり
ささるはさすふあつたりといふ
あつてはそれなりとていりささるいり
ささるはさすふあつたりといふ
あつてはそれなりとていりささるいり
ささるはさすふあつたりといふ

小弁

○打りてをきかへんてあふぬつらふちうもむれ
ふ月くもり物くもりけり遠くはくはくくろあーの
花さきりけりくもりまはりのくみかきく人よ
さしほりきれんてささくれとくき業の初を
あふぬつらふちうもむれとあーのむなまは
くもりぬつらふちうもむれとあーのむなまは

引 打はまきかへんてあふぬつらふちうもむれ
何のむなまはりのくみかきく人よ

本より因やうあふぬつらふちうもむれ

引 山雲のむなまはりのくみかきく人よ
くらのの園もやうかへんてあふぬつらふちうもむれ

藤原盛朝馬

○あつちよ思ひもつらふちうもむれ
月のやうもりあつちよ思ひもつらふちうもむれ
くもりぬつらふちうもむれとあーのむなまは
たあふぬつらふちうもむれとあーのむなまは
くもりぬつらふちうもむれとあーのむなまは
又くもりぬつらふちうもむれとあーのむなまは
くもりぬつらふちうもむれとあーのむなまは
世中くもりぬつらふちうもむれとあーのむなまは
くもりぬつらふちうもむれとあーのむなまは
くもりぬつらふちうもむれとあーのむなまは
くもりぬつらふちうもむれとあーのむなまは

後成

くもりぬつらふちうもむれとあーのむなまは

雲井と云ふ所のさつひはくくは禁中のみ
しきりくくさうりやう方の花らんくををれ
ゆーまをををををををの神はさあられえ
てゆかふ月の朝のやうくくくくくくくく
ままうゆくくくあをれくくくのおりーあま
いめくくくくくーゆきやくくくくくくくく
雲きくくくく月を月を月をたたく雲をくく
よたさうりやうの神はさえのやうくくくく
のゆ也

増基法師

○天の赤らるのよひうりあられは袂は月のせよけり
くくくくくくくくくくくくくくくくくく

方のとを思はくくくくくくくくくくく
ゆきりふゆの友とらなされくくくくくく
は神の隣は月のやうくくくくくくくく
あめたるくと思へん袂は月ハ出けりよ
くくくくくくくくくくくくくくくくく
くも也

慈園

○晨の月乃り来とあめてうむもの隣はくくく
ゆきりふゆの友とらなされくくくくくく
あめたるくと思へん袂は月ハ出けりよ
くくくくくくくくくくくくくくくくく
くも也

新古今言四

朝権若

寂しうあれとくまきしき心なる
落野僧手在く深禁半夜鐘とあり。是は我
侍の限をあくうごもといつりこのうらふごらひ
野寺訪僧歸 帯月さうくへり夕夕とハさう
つごとのなるまきりとも何也うごとのとえうら
びしゆーごも心なる

引 花のこととて乃らうら山里はらぬをみるくうりけこ
とよめりごらふごらりさうとらるるをいさるうさうへ

うりさるるといつらるるは心なる本なる

^本章はまきりぬらうらうらまきり月のひまよそは海くく

本なるごらるるまきり月よちびりひくせあーごらるる
ごらるる

秀施

〇月とあつ雲のほろとそはほろこ山おれをゆくあつか
宵の福の光を雲を月よそよそのありはあつ
るなりとそよもこつ凡の音志はすうら山おれをま
小蘭るとのちさやごらるる山あつ凡のひま
淡よ。眼あのをす也。然るに殺傷の時乃さうあれと
あつはるよとそはゆり

西乃

〇月のまよなをあつくはゆやまちとちぬれあつせれ
月とみく。わんれよまらうらと面白くあつりあ
えぬ。せよのうまぬらさあつら月よこをうめ
ゆらぐーやといつる道心者のこつあつあつれたり。

新古今言四

十

ろめ師やとそむいーと云々也本字
考
此風各の如くありせばこゝに於て此の如きものや
足す一やと云ハ云々一やハなり

同

○更にはけつ世のうけをなほよきよ月のくまよきよより
我のまををわつるまをひのうらなむまよひうけこ
ろしんもまをよのうげまは^心のまを^心のまを^心のまを^心のまを^心
月をまをくよりまをまをくく^心のまを^心のまを^心のまを^心
やうなりのまをくく^心のまを^心のまを^心のまを^心のまを^心
まをまをくく^心のまを^心のまを^心のまを^心のまを^心
うらよぢやと月の山のくまよちくく^心のまを^心のまを^心
わく^心のまを^心のまを^心のまを^心のまを^心のまを^心

りまをまをくく^心のまを^心のまを^心のまを^心のまを^心
りハスー^心のまを^心のまを^心のまを^心のまを^心のまを^心
のくまに今^心のまを^心のまを^心のまを^心のまを^心のまを^心

入道親王是性

○なつめてまに^心のまを^心のまを^心のまを^心のまを^心のまを^心
月を約せ^心のまを^心のまを^心のまを^心のまを^心のまを^心
おつらまに^心のまを^心のまを^心のまを^心のまを^心のまを^心

蒸田

○林とく月をまをまをまをまをまをまをまをまをまを
軍^心のやとまの屋とく^心のまを^心のまを^心のまを^心のまを^心のまを^心
まをまをまをまをまをまをまをまをまをまをまを
まをまをまをまをまをまをまをまをまをまをまを
まをまをまをまをまをまをまをまをまをまをまを

らーとまり

二條院後交

○月のうさふ月やあらぬと詠まはるるの報うもりくる
先づお初りもつらりたふとてお也身の程もあゆみま
に月とそれとあふれもあつて出されんがのほ
のりたつ時ぞ一月の光は八のりりつらやらん
詠うは神よもりくる。月のさやうはまれり
むらりの月よもりやうに輪かんとんこい
身のうさをあらたふらう。世の面影はくま
らのおくろとわらんふよや

括收殿

○天のたむけぬこの雲より神代の月の歌うのこれる

本巻

あすのたむけぬこの月をねん。まよとらやわらけ
は春あいらくほ。あつらなむ。あつらなむ。天照大神
雲戸の二の月あり。と詠く。の神代系あり。
あつらなむ。あけておあひ。つらり。まよあり。
よとあけこの月をねん。日神の雲戸と出ゆ。
まよ。つらり。つらり。つらり。つらり。

法橋行遍

あつらなむ。つらり。つらり。つらり。つらり。つらり。
月あつらなむ。まよ。あつらなむ。つらり。つらり。つらり。
つらり。つらり。つらり。つらり。つらり。つらり。
あつらなむ。つらり。つらり。つらり。つらり。つらり。
あつらなむ。つらり。つらり。つらり。つらり。つらり。

ヤしろにめいよあらしまうのんりふよありそ神は
やしろへーとかりすろまははういまもろりけ
いよしろろもあろー

具釈

○孫すも孫もてまのあゆらうん月行波のあしのはらうね
海も眺をよと云起也よと海上の眺をよ又雲乃
はらうの舞とろんく云語乃め也とたなりあ海
ハは真を未と人よあゆめを初りしていんは
中一さうと月始よ面白氣をそへつらと
うかなのし

倭成

○童やろ林のなまあれかきゆとほらん林のなま

杖ほくろひらさろ一ちまの面敷あられよう
ゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆー
人まむあももろん信らま家ありけろ
くろいゆやろあろん信のちやろまろ
あそれよもゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆー
のまよたいてむらりゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆー
ひきゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆー
まのまろくごめらぶち河お信とまゆ
能いひむかせらまろくくゆかたの
たのびろあゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆー
くちのりる面敷するは風情及うさなり

通光

○あいらよむ神は枯れ枯の若されぬ若くぬくあいられ
五文字葉屋のあいらありぬく小懐旧也神了
枯れ一とは花よ若葉よの成成うり世とのあ
まを親おとされた只神の縁とありて若くせぬあ
といふるを枯の若とこのものは若り霜よは若
葉木皆枯るかなんものなまはなかりとて
ぬ若をあれとてうり世の若のうりなり風
若とらますものなまは若をさすむとて
うりよ若葉をうりよあり清葉生とあれとて
ぬりよりこなたい風の若よりとてぬれ
とてそのの風をうり也
風をうりて里はあいらい風の若くぬくあいら

葉を言止

十五

とてぬあいらあいらよのよくたつものさみいなり也
風の若り風をい若をほらうとてむりかのみりハ
かすれとて若いり世の若をさすうり
あいらいさめうかたうり若をさすうり
うり也也我のうり世はむむいり
この也寄風葉はうり世の若也うり葉と
うりうり也也若葉をさすうり葉と
うり葉よの若をさすむり葉とて葉よの風
とてはうり葉とてあり

後成也

昔のうりうり葉の若をさすこの若くあいら風
くむり神若りうりうり葉をさすこのありとて

十五

十五

うらまゝとよかり人をうらまゝをうらまゝ
とよかりていつるやうにこのくもをうらまひ
ふも括くしてとよかり思ふのさ見たるやう
は泣もあつたがもつとる林の神のさう
夏の夜をうらまひくつよかりは林月のさんく
つよかりとよかり新のあふさう也

紫式部

○おのれはちりの友をみづから小落のよまけつるかきとよかり
法成寺入道兼太政大臣女御をとおろしこのよまけ
つよかりとよかりとよかりとよかりとよかりとよかりとよかり
くまもつとよかりとよかりとよかりとよかりとよかりとよかり
まもつとよかりとよかりとよかりとよかりとよかりとよかりとよかり

あつとせむらひのよまけとよかりとよかり
てよまけとよかりとよかり

法成寺入道兼太政大臣

○白濁いふまゝとよかりとよかりとよかりとよかりとよかりとよかり
はつとせむらひのよまけとよかりとよかりとよかりとよかりとよかり
なまもつとよかりとよかりとよかりとよかりとよかりとよかりとよかり
まもつとよかりとよかりとよかりとよかりとよかりとよかりとよかり

曾祿好忠

○山里にらまゝとよかりとよかりとよかりとよかりとよかりとよかり
まもつとよかりとよかりとよかりとよかりとよかりとよかりとよかり
まもつとよかりとよかりとよかりとよかりとよかりとよかりとよかり

安法と勝

○百々林の歌はさきかぬつきの昔は流し海に
さかきとせうとせうの年をさきしうとせうと

家澄

○さう代はうらむのむれ本も米のふいぎを海に
まのしめくもなぬとくろあられの海本もまを
しうまのしうまのうらによそふまあり

雑奇中

河津白鳥

○白浪のそちえのたはけりてみんくはとみり年のへんえ
兼島五年九月紀伊國よ新卒の時とあり。は
白鳥のそちえのたはけりてみんくはとみり年のへんえ
ねよしうまのそちえのたはけりてみんくはとみり

橋政殿

○今もぬ不破の園やの扱ひしうしむる後かち林の外
不破の園いあまうとよむしむる後かち林の外
今もぬ不破の園やの扱ひしうしむる後かち林の外
今もぬ不破の園やの扱ひしうしむる後かち林の外
今もぬ不破の園やの扱ひしうしむる後かち林の外

まゝにいひむと申しても幸来候也
ゆゑにいふよき人なれとてうゝ
せんきうこのまゝ候也とてうゝ
とありけりせんいぢらうとて
お波の海のせにむしとていぢらう
うやうのまゝあり候なり

後冷泉院法皇

○御入心候御後
大貳之位にむしとていぢらうとて
せりあり候なりとていぢらうとて
はけあり候なりとていぢらうとて
あり候なりとていぢらうとて

大貳之位

○位者のむしとていぢらうとて
ねとていぢらうとていぢらうとて
あり候なりとていぢらうとて

意圖

○在申とていぢらうとていぢらうとて
あり候なりとていぢらうとて
あり候なりとていぢらうとて

○周ちあひく富士の嶽のふもとに
あり候なりとていぢらうとて

新井 孫子よりんふくれたり格くの後り色をも不用只
此まの一々のさ海すしてあり

巻四

○おもひつゝ思ひのたそと思ひのたそをみりしつゝ
しゝのいひんしよ花よらきしありて入なり
又世よりしんみふらん入なりとてしうむをいし
いよえしとてしうむととなりしうのふりおこ
えしゝのいひんしゝつるなり

藤原家備朝臣

○おもひつゝ思ひのたそと思ひのたそをみりしつゝ
しゝのいひんしよ花よらきしありて入なり
又世よりしんみふらん入なりとてしうむをいし
いよえしとてしうむととなりしうのふりおこ
えしゝのいひんしゝつるなり

○おもひつゝ思ひのたそと思ひのたそをみりしつゝ
しゝのいひんしよ花よらきしありて入なり
又世よりしんみふらん入なりとてしうむをいし
いよえしとてしうむととなりしうのふりおこ
えしゝのいひんしゝつるなり

通具

○おもひつゝ思ひのたそと思ひのたそをみりしつゝ
しゝのいひんしよ花よらきしありて入なり
又世よりしんみふらん入なりとてしうむをいし
いよえしとてしうむととなりしうのふりおこ
えしゝのいひんしゝつるなり

あし家

○おもひつゝ思ひのたそと思ひのたそをみりしつゝ
しゝのいひんしよ花よらきしありて入なり
又世よりしんみふらん入なりとてしうむをいし
いよえしとてしうむととなりしうのふりおこ
えしゝのいひんしゝつるなり

ねまゝにひらきぬるものなり
ねまゝにひらきぬるものなり
ねまゝにひらきぬるものなり
ねまゝにひらきぬるものなり
ねまゝにひらきぬるものなり
ねまゝにひらきぬるものなり
ねまゝにひらきぬるものなり
ねまゝにひらきぬるものなり
ねまゝにひらきぬるものなり
ねまゝにひらきぬるものなり

直林院丹後

○おまのいひよりいひぬる
あつたのいひよりいひぬる
あつたのいひよりいひぬる
あつたのいひよりいひぬる
あつたのいひよりいひぬる
あつたのいひよりいひぬる
あつたのいひよりいひぬる
あつたのいひよりいひぬる
あつたのいひよりいひぬる
あつたのいひよりいひぬる

さうしたるも也律観さうしたるも也律観

麻葉のあつた

山里をうさせしむる志のいひは

山里をうさせしむる志のいひは

後成

○今もそいふ本あるとてやそのねらふよと人君と相いのうらね
いふとそいふ本あるとてやそのねらふよと人君と相いのうらね
いふとそいふ本あるとてやそのねらふよと人君と相いのうらね
いふとそいふ本あるとてやそのねらふよと人君と相いのうらね
いふとそいふ本あるとてやそのねらふよと人君と相いのうらね
いふとそいふ本あるとてやそのねらふよと人君と相いのうらね
いふとそいふ本あるとてやそのねらふよと人君と相いのうらね
いふとそいふ本あるとてやそのねらふよと人君と相いのうらね
いふとそいふ本あるとてやそのねらふよと人君と相いのうらね
いふとそいふ本あるとてやそのねらふよと人君と相いのうらね

あつた

○紙のうらみ今おとさるる小神ふまへるる海乃ねる

はやくとひらりわか〜はれとさげ〜さけ〜
 四道のあり〜はれとさげ〜はれとさげ〜神の上〜
 ち〜ひらりわか〜はれとさげ〜はれとさげ〜
 う〜ひらりわか〜はれとさげ〜はれとさげ〜

般若院木楠

○ひらりわか〜はれとさげ〜はれとさげ〜
 ひらりわか〜はれとさげ〜はれとさげ〜
 ひらりわか〜はれとさげ〜はれとさげ〜
 ひらりわか〜はれとさげ〜はれとさげ〜
 ひらりわか〜はれとさげ〜はれとさげ〜

定家

○信成のあり〜はれとさげ〜はれとさげ〜
 後白河院密教なりた〜はれとさげ〜はれとさげ〜
 のひらりわか〜はれとさげ〜はれとさげ〜
 ひらりわか〜はれとさげ〜はれとさげ〜
 ひらりわか〜はれとさげ〜はれとさげ〜
 ひらりわか〜はれとさげ〜はれとさげ〜
 ひらりわか〜はれとさげ〜はれとさげ〜
 ひらりわか〜はれとさげ〜はれとさげ〜
 ひらりわか〜はれとさげ〜はれとさげ〜
 ひらりわか〜はれとさげ〜はれとさげ〜

般若院僧正園由大政春

行書
 二七

いほ保の御代に
藤原氏の流に
いふあけいふゆふとば友位なるのら
いふふふか

人丸

○この世にわがまらにのありまは
氏は心十氏あり我々の
この國はまればるものい
名をけし家やあそく
小治のまらにのちま
とわくありゆるふ
いふちちのいふ

いふふふふふふふふふふふ

中納言の平

○この世にわがまらにのありまは
いふあけいふゆふとば友位なるのら
いふふふか
只きふあけいふゆふとば友位なるのら
いふふふか
いふあけいふゆふとば友位なるのら
いふふふか

あはれ
あはれ
あはれ

二條園白内大長

○あとのそよみゆるい白雲のうらみ満つるぬのひこの
水とのあまうさ詮をんごうたるまきさうの
布の縁也

栲波殿

○むしきくあいのうらみあまきさきあまきさ
天の河内國也むしきく
たきいにくらるひくらの西はみくく
七文つめよやそく人天川糸よたきく
ちりりそまるあられにらむをさく水さ
むあしくはぬもあつるうらみ也

東方綱目

○後川うらみ海木にとんね糸のうらみあまきさ
はあまきさく天のうらみあまきさく
別をんぬ事ゆきありお糸のうらみ
あまきさく七文をまきく
とまのあつらつきのあまきさく
にそくしたるまきさく
あまきさくうらみあまきさく

前中納言匡房

○あまきさをあまきさく
あまきさをあまきさく
あまきさをあまきさく

ふらふらより夢をとりあり

中勢

○はらわらぬよふにまてぬき川をわたりしむがたれ
あす川にうらせのうらりやまを川とよんてあき
せりちかきめたうらあよまといつりされとて
そやこりつひも一様ようまといふらむも
わたり一団れせと扇風の揺あれたよりあり
たぐくかたうらあり

西の

○山にうらむとせいにん友をうらくやうとつり一音のこえ
惟ま頼はふたはるまのうらなりの船
雲のいさうあつたうらふくたつて

^本 言れは夢をたどりあひとや常とてむとみん
あつたうらむの海をうらむらえ後うらや
あつたうらむの海をうらむらえ後うらや
あつたうらむの海をうらむらえ後うらや

同

○山にうらむとせいにん友をうらくやうとつり一音のこえ
惟ま頼はふたはるまのうらなりの船
雲のいさうあつたうらふくたつて

大僧云約する

○山にうらむとせいにん友をうらくやうとつり一音のこえ
惟ま頼はふたはるまのうらなりの船
雲のいさうあつたうらふくたつて

行舟也 是れは 能く 能く 能く 能く 能く 能く 能く 能く 能く 能く
と せし 乃ち 八 邊 通 道の ちと せし 乃ち あり せられた のめ ち
と ば 人よ せら せら せら せら せら せら せら せら せら せら
ら せら せら せら せら せら せら せら せら せら
く せら せら せら せら せら せら せら せら せら せら
と せら せら せら せら せら せら せら せら せら せら
と せら せら せら せら せら せら せら せら せら せら

家隆

○つゝ 哀 若 の 徳 小 名 存 在 せ ぎ ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
沈 冥 の 文 の 終 び 末 へ は け くの ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
ら ち
百 首 名 ち

小侍

○橋 づゝ 山 谷 の 終 び 乃 ち せ ぎ ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
面 目 ち
い ち
ゆ づ
ゆ づ
ゆ づ
ゆ づ

橋政殿

つゝ 山 谷 の 終 び 乃 ち せ ぎ ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
ゆ づ
ゆ づ
ゆ づ
ゆ づ
ゆ づ
ゆ づ

人なやうなまゝへしてらす月日を過して
また書の内容は、いかにして書かへんか
いかに

雑經

○これ、いかに書かへんか、いかに書かへんか、
いかに書かへんか、いかに書かへんか、
いかに書かへんか、いかに書かへんか、

巻四

○これ、いかに書かへんか、いかに書かへんか、
いかに書かへんか、いかに書かへんか、
いかに書かへんか、いかに書かへんか、

孝子内親五

○これ、いかに書かへんか、いかに書かへんか、
いかに書かへんか、いかに書かへんか、
いかに書かへんか、いかに書かへんか、

後成

○これ、いかに書かへんか、いかに書かへんか、
いかに書かへんか、いかに書かへんか、
いかに書かへんか、いかに書かへんか、

○右細のうらむるしむるのあはれなるのさるる此のさ
あつたていあれたる細也うらむるのあはれなるのさ
るはさるるのさるるのさるるのさるるのさるるのさ
是れはさるるのさるるのさるるのさるるのさるるのさ

天智天皇御記

○あつたていあれたる細也うらむるのあはれなるのさ
いさるるのさるるのさるるのさるるのさるるのさ
さるるのさるるのさるるのさるるのさるるのさ
さるるのさるるのさるるのさるるのさるるのさ
さるるのさるるのさるるのさるるのさるるのさ
さるるのさるるのさるるのさるるのさるるのさ

雜奇下

菅贈太政大臣

○次ぐはさるるの時におれたるさるるのさるるのさ
むさるるのさるるのさるるのさるるのさるるのさ
さるるのさるるのさるるのさるるのさるるのさ
はさるるのさるるのさるるのさるるのさるるのさ
はさるるのさるるのさるるのさるるのさるるのさ
あそくさるるのさるるのさるるのさるるのさ

持政殿

○船のうらむるのさるるのさるるのさるるのさるるのさ
舟のうらむるのさるるのさるるのさるるのさるるのさ
さるるのさるるのさるるのさるるのさるるのさ
さるるのさるるのさるるのさるるのさるるのさ
さるるのさるるのさるるのさるるのさるるのさ

新吉註

いっり

増上人

○うまむらもとは舟の着とていつかの浦りやいけ成と
前をいふくさむらもといひまのぢぢいさ
かへん一づかろも浦りやいけなるんさ
のり来のきめなさいとあけくさむらなり

東之條院 兼家云

○このいれまのうまむらとい衣のうらとたのま
後いれまける内は泉院の衣のまらあひい
まらけつりうらとて出まの内をいなりけと
女房のいれまの時髪あけくさむらひらうのう
うらとてこのせうれをいれまの浦り

せうとていれまのうらとて衣のうらとたのま
後いれまける内は泉院の衣のまらあひい
まらけつりうらとて出まの内をいなりけと
女房のいれまの時髪あけくさむらひらうのう
うらとてこのせうれをいれまの浦り

泉院大僧大名家

○はつとていれまのうらとて衣のうらとたのま
後いれまける内は泉院の衣のまらあひい
まらけつりうらとて出まの内をいなりけと
女房のいれまの時髪あけくさむらひらうのう
うらとてこのせうれをいれまの浦り

批 把皇太后宮

新吉註

二九

○かくろくん夜の色を宿いやは海やうらね小舟うらも
と東門院の夜の後うらみのほろそくーたさえ
のまじい梅のくこよ入る梅のえこよつらとせら
まけり河ちせもと衣裏室珠のあいら也信也家
のちかよまじいらつらん夜の色をいつらまじいのま
とやうそらせりのまよどりなつれりあうこい
親恋のあみこかろくー

と東門院

○はくろくん夜の色にそれつねとさあれちうらま
まろくんとは雲のさう海やうらのまふゆらん
とあまはくろくよあうらうらり夜の色よそれ
つらばおのまこれのまじいらつらあまこのまを

とかりされんをばあはちめぬうら世のゆめよ
いらのこらまあよととなり

和歌式部

○梅のまたよその浦にわたれん今いらうらのよひをま
いあひもあははち方のせんもさうくは事をもま
うしなもいさる也梅のゆとんまがのひうらあちなる
るしと梅のま小貝はさ梅くまちわたるま
つら方のようひいたりぬるともあうらと也

天曆御記の

○かあり雲のなまあわらふのよう水のまふまあらん
かおるまは梅川よのちりくがらちらちるゆふ
けらとさうせまひくつらもる何年や

第一のありありの中でのありありたること也初より
を橋川のほとりへゆくとたかきしめやうと
かりかきしめ

あは

こ百敷のつらつらにひらく雲のふりかざり
折敷のふりかざりなむつねよひひくやま
かまきよあはれやうめりあはれまきしめ
あはれまきしめくうめりあはれまきしめ
かまきよあはれまきしめあはれまきしめ
ようりてはひしとゆりまきしめあはれまきしめ
あはれまきしめあはれまきしめあはれまきしめ
あはれまきしめあはれまきしめあはれまきしめ
あはれまきしめあはれまきしめあはれまきしめ

権を親王

○まのつらつらにひらく雲のふりかざり
せまきよあはれまきしめあはれまきしめ
初長の子乃いつたりやうりはまきしめ
けいこまきしめあはれまきしめあはれまきしめ
あはれまきしめあはれまきしめあはれまきしめ
あはれまきしめあはれまきしめあはれまきしめ
あはれまきしめあはれまきしめあはれまきしめ
あはれまきしめあはれまきしめあはれまきしめ
あはれまきしめあはれまきしめあはれまきしめ
あはれまきしめあはれまきしめあはれまきしめ

教東洋正

○あまのつらつらにひらく雲のふりかざり
あはれまきしめあはれまきしめあはれまきしめ
あはれまきしめあはれまきしめあはれまきしめ
あはれまきしめあはれまきしめあはれまきしめ
あはれまきしめあはれまきしめあはれまきしめ
あはれまきしめあはれまきしめあはれまきしめ
あはれまきしめあはれまきしめあはれまきしめ
あはれまきしめあはれまきしめあはれまきしめ
あはれまきしめあはれまきしめあはれまきしめ
あはれまきしめあはれまきしめあはれまきしめ

よはりのくゞ位はありて下にくる事也
かしくり雲井はうつくしき人こそと云ふ事
かぬひあ〜と云ふ事也

後朱雀院法皇

○傍りてあの方とみるもいむもさしこころあつたなり
上東門院の陽院はたゞし海けりよはり
ゆりてせとて入らる傍り遠く昔許由の
類川のよはり身をあらひ〜幾人の心の傍り
今いふもいふ事人〜傍りまもいふ事
かぬひあ〜と云ふ事也

周防内侍

○あ〜と云ふ事人〜傍りまもいふ事

後中納言通俊は捨老と云ふひけり此の
〜と云ふ事人〜傍りまもいふ事
あ〜と云ふ事人〜傍りまもいふ事
〜と云ふ事人〜傍りまもいふ事
と〜と云ふ事人〜傍りまもいふ事
音羽の世に〜と云ふ事人〜傍りまもいふ事
いふ事人〜傍りまもいふ事
ゆり〜と云ふ事人〜傍りまもいふ事
ら〜と云ふ事人〜傍りまもいふ事
か〜と云ふ事人〜傍りまもいふ事

和泉式部

○あ〜と云ふ事人〜傍りまもいふ事

はるかにしむる御業なりけるまはたけりかの
ゆゑにあらはれし人の人よきものなり
あつたむしとかなりしあれたるもあらはれむ
人のたまひしとありしとあり

意園

○世の中のいづれもいづる世のまはたけりし人の
世中のいづれもいづる世のまはたけりし人の
なりけりかのはしむるまはたけりし人の
早下のまはたけり

同

○たのころりむるまはたけりし人の
かゝるまはたけりし人のまはたけりし人の

あつたむしとかなりしあれたるもあらはれむ
人のたまひしとありしとあり

意園

○探題しむるまはたけりし人の
まはたけりし人のまはたけりし人の
又けはむしとかなりしあれたるもあらはれむ
人のたまひしとありしとあり

意園

○教なりぬるまはたけりし人の
あつたむしとかなりしあれたるもあらはれむ
人のたまひしとありしとあり

立論の序

同

○たつたるふひては世にまゝしむるふりかたは
愚癡なる心より出づる也はたつた
かゝるは海を舟に渡すの如し舟に
いかにたつたるは世にまゝしむる
如し

寂蓮

○たつたるふひては世にまゝしむるふりかたは
愚癡なる心より出づる也はたつた
かゝるは海を舟に渡すの如し舟に
いかにたつたるは世にまゝしむる
如し

也をたつたるは世にまゝしむるふりかたは
愚癡なる心より出づる也はたつた
かゝるは海を舟に渡すの如し舟に
いかにたつたるは世にまゝしむる
如し

同

○たつたるふひては世にまゝしむるふりかたは
愚癡なる心より出づる也はたつた
かゝるは海を舟に渡すの如し舟に
いかにたつたるは世にまゝしむる
如し

同

○たつたるふひては世にまゝしむるふりかたは
愚癡なる心より出づる也はたつた
かゝるは海を舟に渡すの如し舟に
いかにたつたるは世にまゝしむる
如し

同

同

君の世よあまのすひかめを前よせんもては
神よもを君の世よあまのせんもては也
きどりくわくよめ

素戔

のたむけの社をのむとむを君の世よあまのすひかめを前よせんもては也
用てあまのすひかめを前よせんもては也
是を本とのすひかめを前よせんもては也
おしよとくく道のくわくく巨細よたりたり
ゆかたり

同

のたむけの社をのむとむを君の世よあまのすひかめを前よせんもては也
用てあまのすひかめを前よせんもては也
是を本とのすひかめを前よせんもては也
おしよとくく道のくわくく巨細よたりたり
ゆかたり

杖ねの道よたむけの社をのむとむを君の世よあまのすひかめを前よせんもては也
いさくし海をのむとむを君の世よあまのすひかめを前よせんもては也
のよのんまをせよや早トーくはる也

同

のよのんまをせよや早トーくはる也
うの山とらとらぬとむを君の世よあまのすひかめを前よせんもては也
らぬとらとらぬとむを君の世よあまのすひかめを前よせんもては也
めとらとらぬとむを君の世よあまのすひかめを前よせんもては也
海はちちくくも也

雅經

のよのんまをせよや早トーくはる也
うの山とらとらぬとむを君の世よあまのすひかめを前よせんもては也
らぬとらとらぬとむを君の世よあまのすひかめを前よせんもては也
めとらとらぬとむを君の世よあまのすひかめを前よせんもては也
海はちちくくも也

同

そめ物と申すは昔よりある事かといふ事申すは
中へ申すの事なればなるに人の心はにほひ
りものいふにいとくはる

たき申す事

推らぬにいとくはるにいとくはるにいとくはる
いふ事なればなるに人の心はにほひ
推らぬにいとくはる

いふ事なればなる

いふ事なればなるに人の心はにほひ
推らぬにいとくはるにいとくはるにいとくはる
いふ事なればなるに人の心はにほひ

いふ事なればなるに人の心はにほひ
推らぬにいとくはるにいとくはるにいとくはる
いふ事なればなるに人の心はにほひ

いふ事なればなる

いふ事なればなるに人の心はにほひ
推らぬにいとくはるにいとくはるにいとくはる
いふ事なればなるに人の心はにほひ

いふ事なればなる

いふ事なればなるに人の心はにほひ
推らぬにいとくはるにいとくはるにいとくはる
いふ事なればなるに人の心はにほひ

ふしのねとよかりなることいふはしるしのさか
くも体はしちちから也がくそんてしちり
しめまきとみんいかり

鴨長明

〇まきばらひいひみさうりちりちりちりちりちりちり
がのちちちちひひちちてはのましちりちりちりちり
に力ちちちりけりちりちりちりちりちりちりちり
ちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちち
ちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちち
のちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちち
のちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちち

源季景

〇回いひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひ

二ちいひちりちりちりちりちりちりちりちりちりちり
色ひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひ
いひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひ

西の

〇月のひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひ
月夜とちちちちちちちちちちちちちちちちちちちち
のちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちち
ちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちち
ひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひ
ひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひ

慈園

〇ひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひ
ひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひ

訂正

七

ゆれを頼^{たの}みの頼^{たの}みはあらねんさやうの頼^{たの}門
あつと定^{さだ}められたる月を頼^{たの}みたるに頼^{たの}みたる
一々れとのめあつとくはなれりまはる月のお
たつたふもの頼^{たの}みたるはなれりまはる月のお
なつとくはなれりまはる月のおたつたふもの
くせはありあつとくはなれりまはる月のお
あつとくはなれり

前右大御親

○藤原のいふてあつとくはなれりまはる月のお
前大御正意因^{まへおほおんぎいん}もはなれりまはる月のお
いふてあつとくはなれりまはる月のお
いふてあつとくはなれりまはる月のお

坪^{つら}より坪^{つら}より日本の中央也と石^{いし}の碑^{ひし}文^{ぶん}を
のりより坪^{つら}のころあつとくはなれりまはる月のお
くせはありあつとくはなれりまはる月のお

白鳥かつ院

○おはるや久^{ひさ}はなれりまはる月のお
おはるや久^{ひさ}はなれりまはる月のお
おはるや久^{ひさ}はなれりまはる月のお
おはるや久^{ひさ}はなれりまはる月のお

俊成

○おはるや久^{ひさ}はなれりまはる月のお
おはるや久^{ひさ}はなれりまはる月のお
おはるや久^{ひさ}はなれりまはる月のお
おはるや久^{ひさ}はなれりまはる月のお

せしきまことめりまたのそとけしきくきつる
かをほりしのかほひひして神魚ももまれ
やうをたまふんとらめりらるるなり

家隆

○春日の埋木朽ぬるも君よつけせせきのねん
うすう山谷の埋木は朝に散るあれまき
山とらめりらるのむりれ本まは方のしりま
勢をまきく朽くつるとまきは神魚のつらま
ふりくまらせやととやとわららとこまき
はまこせきのねんまはらめり玉塔の心るま

藤原実方約長

○まのせきのねんまはらめり玉塔の心るま

院時の勢のねんまはらめり玉塔の心るま
とまのねんまはらめり玉塔の心るま
しきまのねんまはらめり玉塔の心るま
まのねんまはらめり玉塔の心るま
かまのねんまはらめり玉塔の心るま
ありまのねんまはらめり玉塔の心るま
まのねんまはらめり玉塔の心るま
まのねんまはらめり玉塔の心るま
あまのねんまはらめり玉塔の心るま
まのねんまはらめり玉塔の心るま
まのねんまはらめり玉塔の心るま

よきことあり

藤原通信御片

あつきの井の夜あつきせはきつらつこもとありやまぬ
たのほあるれどもくつらつらあり

か頭お徳

あつなうとてふんせよと教あるお若のまねかまふ
後冷泉院内河大奉會は日くまのくみりて
新基朝臣のまもふつらつらあり
は内とせくつらつらあり
おまをきつらつらあり
日朝のくみりてとせつらつらあり
それとせつらつらあり

小野お町

あつきの風おみらてとままらつらつらあり
あつちてまはらつらつらあり
あつちてまはらつらつらあり
あつちてまはらつらつらあり
あつちてまはらつらつらあり
あつちてまはらつらつらあり
あつちてまはらつらつらあり
あつちてまはらつらつらあり

後成

あつちてまはらつらつらあり
あつちてまはらつらつらあり
あつちてまはらつらつらあり
あつちてまはらつらつらあり
あつちてまはらつらつらあり
あつちてまはらつらつらあり
あつちてまはらつらつらあり
あつちてまはらつらつらあり

良家の内はそんくも成りて成りて
我洞をうらむのゆかりて落すよとあり

崇徳院御新

○やうぬはたか風をわらけとありはあはれうらむ
かうとあはれゆよひのみちをうらむ

ふた内

○ゆめは風をうらむとありはあはれ
ゆめは風をうらむとありはあはれ
ゆめは風をうらむとありはあはれ

西行

○ゆめは風をうらむとありはあはれ
ゆめは風をうらむとありはあはれ
ゆめは風をうらむとありはあはれ

女上の御事なるるのゆかりて
あらぬ方也と終り歎念とありはあはれ
しるをうらむとありはあはれ
も又命あらはせよとのしるをうらむ
引まよひの目もいぬらむとありはあはれ

和泉式部

○あらぬのゆかりて
けいせいの御事なるるのゆかりて
人をもすしに歎念とありはあはれ
方のゆかりて
まよひの目もいぬらむとありはあはれ

おを歎きしつてゆへに評也千載集に
ほくま思ひかへりて人の言れどもそは
ほくま思ひかへりて人の言れどもそは
ほくま思ひかへりて人の言れどもそは

古語門内大臣

○作位をわねのちれとよと思送しれしひある
くわおまは友位よ翠らなをよよとて
よあり位をわねとよは先程の位よとて
乃ほくま思ひかへりて人の言れどもそは
ほくま思ひかへりて人の言れどもそは

源俊賴

○ほくま思ひかへりて人の言れどもそは
ほくま思ひかへりて人の言れどもそは
ほくま思ひかへりて人の言れどもそは

偽正通昭

○ほくま思ひかへりて人の言れどもそは
ほくま思ひかへりて人の言れどもそは
ほくま思ひかへりて人の言れどもそは
ほくま思ひかへりて人の言れどもそは
ほくま思ひかへりて人の言れどもそは

西宮前左大臣

是より枝より花の流清をねとやまれば
はるる花とありて定く程うゆらんひより花
とは花のひより花をねと花をねと
なる一し。花のひより花をねと
をねとまら命也。花はひより花をねと
結えぬ程も露命とて之をねと花をねと
あつたのねとをねとをねと花をねと
なるとなり

後成

小藤東風り流の清やうとけし
やうしうとけし小藤東風り流の清やうとけし
花のひより花をねとをねと花をねと

しんくち也 花の流の清やうとけし
花のひより花をねとをねと花をねと
少翁よりけねは轉を事一なるなり

意田

しんくち也 花の流の清やうとけし
花のひより花をねとをねと花をねと
ゆくと今をうとけし

同

〇しんくち也 花の流の清やうとけし
花のひより花をねとをねと花をねと

ありけりしものよりいふもふとありし也あきら
けくらしむいふとされくくつる方されけりけく
何とせんと候たるより也らつて捨て置る方は
うとせの事を捨くくぬるとあるとある事也

曰

○何とせよはせとありしとせと人の心よりやとせとありし
はせとせりけりけり後世の心よりやとせとありしとせ
後世の心よりやとせとせよはせとせとありしとせと
たつとせとあり

曰

○思ふ心は世の心ありしとせとせりけりけり世の心
よりやとせとありしとせとせりけりけり世の心

かたれんどもとせりけりけり世の心ありしとせとせり
なれりけりけり世の心ありしとせとせりけりけり世の心
遠藤の人より後世とせりけりけり世の心ありしとせと
よとせりけりけり世の心ありしとせとせりけりけり世の心
心より又候は候は候は候は候は候は候は候は候は候は候は
後世とせりけりけり世の心ありしとせとせりけりけり世の心

(西行)

○思ふ心は世の心ありしとせとせりけりけり世の心
よりやとせとありしとせとせりけりけり世の心ありしと
よとせりけりけり世の心ありしとせとせりけりけり世の心
世とありしとせとせりけりけり世の心ありしとせとせり
と候は候は候は候は候は候は候は候は候は候は候は候は

新編 源氏物語 巻四 白河 第三

四三三

曰

○分れつゝおぼえにむしるもめはうらやましく思ふ事なむ
 ともなひのこゝろにせむのこゝろにせむのこゝろにせむのこゝろに
 せむのこゝろにせむのこゝろにせむのこゝろにせむのこゝろに
 せむのこゝろにせむのこゝろにせむのこゝろにせむのこゝろに
 せむのこゝろにせむのこゝろにせむのこゝろにせむのこゝろに

同

○いづれに世よはらえと世よと世よと世よと世よと世よと世よと
 世よと世よと世よと世よと世よと世よと世よと世よと世よと
 世よと世よと世よと世よと世よと世よと世よと世よと世よと
 世よと世よと世よと世よと世よと世よと世よと世よと世よと
 世よと世よと世よと世よと世よと世よと世よと世よと世よと
 世よと世よと世よと世よと世よと世よと世よと世よと世よと

同

○いづれに世よはらえと世よと世よと世よと世よと世よと世よと
 世よと世よと世よと世よと世よと世よと世よと世よと世よと
 世よと世よと世よと世よと世よと世よと世よと世よと世よと
 世よと世よと世よと世よと世よと世よと世よと世よと世よと
 世よと世よと世よと世よと世よと世よと世よと世よと世よと

えまのゆゑにうらやましく思ふ事なむ
 ともなひのこゝろにせむのこゝろにせむのこゝろにせむのこゝろに
 せむのこゝろにせむのこゝろにせむのこゝろにせむのこゝろに
 せむのこゝろにせむのこゝろにせむのこゝろにせむのこゝろに
 せむのこゝろにせむのこゝろにせむのこゝろにせむのこゝろに

入道 藤原白太政大臣

○昔よりうらやましく思ふ事なむ
 ともなひのこゝろにせむのこゝろにせむのこゝろにせむのこゝろに
 せむのこゝろにせむのこゝろにせむのこゝろにせむのこゝろに
 せむのこゝろにせむのこゝろにせむのこゝろにせむのこゝろに
 せむのこゝろにせむのこゝろにせむのこゝろにせむのこゝろに

後頼朝

○いづれに世よはらえと世よと世よと世よと世よと世よと世よと
 世よと世よと世よと世よと世よと世よと世よと世よと世よと
 世よと世よと世よと世よと世よと世よと世よと世よと世よと
 世よと世よと世よと世よと世よと世よと世よと世よと世よと
 世よと世よと世よと世よと世よと世よと世よと世よと世よと

初巻 田

四三三

くゆるとらるるの事なりと云ふは

源作光

○もろくはいつかたかたはなほもろくはなほもろくの程と云ふ事なり

○
くもろくはなほもろくはなほもろくの程と云ふ事なり
くもろくはなほもろくはなほもろくの程と云ふ事なり
くもろくはなほもろくはなほもろくの程と云ふ事なり
くもろくはなほもろくはなほもろくの程と云ふ事なり

西谷

○情ある一昔の程を志のつれづれに

がーきまとの一のまゝなり

神祇

○夜や露のなやらすまかたのゆゑあひのほよりおつた
かゝるもとは社壇の株は打ちくゞけり
ある本の名連り合の戸と二を打ちくゞけり
戸一社の破壊を門へ戸を閉へまほのよ
中傳ら後者のほのよと云はれあり

○我々のむくつらふりては
あまのつらふりては
あまのつらふりては

新庄

一

玉依姬

三統理平

○このいささかあはれき私為てう秋は信あ言えりあけり
天の雲舟ハ天よりくるるう一鳥の名也されい飛翔
と云也

折政殿

○神風天をすそ川のそののみよらとさすしとれきさきた家
ち神又とま日大の神と親臣の山登りて後すや也
ち上天皇

○あさあきる神はれは雲消くゆきの空よせん月うけ
迷の雲消く流るるの夕よあかりしく心月秋あは
らふりあめやと也神海山の山あよ地合より

神海の大神又の山也雲消てよみかえの力に
世と迷園の雲は薄土移温成へともと天照大神
神やさせあよはさあなる

同

○神風やそみくらくれあひてきく年であつと云も
神風の信あよらるるくくるる風風のいけく
つそねく神風のあはれ事と神風とよあり
豊大也きくあひなるとも候もくらくハ神よ
もる神物屋はあきくハ幣のちぐなり
あかろく一があ一と
しと也幣帛只へのの五さのてくは
み色の幣也

西の

○宮後下津定極はあたて露とくくぬ目の出報れ
下津定極といふ代は下男へ降格ありく
その後の奥園かゝるも定極は作の事向くあり
中長極は下津定極は宮極太とあり慶太は
神也露とくくぬ目の出報といふのせめて
うりぬるかゝる

奥園

○やうく露光よけり報れやすかしの松の報り有
太神の所感光のをよとくれく事と月によ
て目りふあする報とあり

中院入道右大臣

○さうり又も海をけりさふもそののぬくの
る初使はくくりゆけりら一のむりやけくよ
え付けり何事也とらよ不氣な一作のむりや
て一作の浦は侍執の名をせじやと
昔ハ初使の通らよ水驛飯驛と友人のふ里が
かりとめて馬よとと人よ答とて
かり一作よと通るや

よんか

○ちあふる香推のえりあはれ神のあうさまたでり也
香推宮院也八幡ありゆりすなりあや候とい
るゆりき香推の志ありとてあや候のあふる
みまこと月神神と傳ふ本也信いむがらるもの

下のほうとよめりまてよとい子孫の末よん
もあれと律は行まよと也

慈園

○やうく報う書よとやあつらひのいろい
日吉の社よまそとらりくらあの中よ二宮と
やららるる凡い新い木利の志い物意の如来あり
日吉の二のこやい本地業作はくゆしすあり
又根本中道の本すると業作あまわれと本のひ
うりいあよとあともとらかんあり

同

○やうく七の原らちのゆなけきとてのあらふとれ
七の社いふ七社の由事れゆだもたると本律あり

他たら林人のつらたてこのやうあつらふとれ
みちよふとてかとは痛也とせまよなく作る也
あつて事一也

同

○やうく日吉此報い書めあゆまゆらきよれ
日吉の報書の報いりしす能生連書とて
あは利生お使たりあゆとて人のくもらうとて
こはをあつてあやとさきあつたれとあは
しなつらげららるるあはれとあはつた
たつ日吉よあつてあひひかると也

同

○まらふの報いりしす能生連書とて

移ししとまのりしとみれ油是もつ心かろく一と
海風とよより海しとまのりしとみれ油是もつ心かろく一と
津大津西津東津もつ心かろく一と

白川院御歌

○津はよきのきとみれ油是もつ心かろく一と
しとまのりしとみれ油是もつ心かろく一と
ぬと津西津東津もつ心かろく一と
あまのりしとみれ油是もつ心かろく一と
あまのりしとみれ油是もつ心かろく一と

大津大吏御歌

○津はよきのきとみれ油是もつ心かろく一と
あまのりしとみれ油是もつ心かろく一と

あまのりしとみれ油是もつ心かろく一と
あまのりしとみれ油是もつ心かろく一と
あまのりしとみれ油是もつ心かろく一と
あまのりしとみれ油是もつ心かろく一と
あまのりしとみれ油是もつ心かろく一と

貫之

○津はよきのきとみれ油是もつ心かろく一と
あまのりしとみれ油是もつ心かろく一と
あまのりしとみれ油是もつ心かろく一と
あまのりしとみれ油是もつ心かろく一と
あまのりしとみれ油是もつ心かろく一と

釋教哥

比叡山中堂建立の日記

傳教大作

○阿耨多羅三藐三菩提の佛達音を抄りて具加あらまへ
て釋多羅三藐三菩提の仏といふまじきと云ふ旨を
仏の上をせりてありきまじき一くまじき旨の
まじきありきなり仏のありをせりてありき

日慈上人

○寂寞の昔の空屋のまじき涙のありきありきありき
ありきありきありきありきありきありきありきありき
ありきありきありきありきありきありきありきありき
ありきありきありきありきありきありきありきありき

あなへく一段とまじきありきありきありきありきありき
ありきありきありきありきありきありきありきありき
ありきありきありきありきありきありきありきありき

上東門院

○濁るる魚弁の水と強ひあけて心のちりきまじき水けりりれ
くよくあつとまじきありきありきありきありきありきありき
色聲香味觸法の六塵と具足なり衆生はさき
りりありきありきありきありきありきありきありきありき
水けりり心のちりきまじきありきありきありきありきありき
魚弁の水をまじきありきありきありきありきありき

法性入道前攝政太政大臣

○やろ所の座よりまじきありきありきありきありきありきありき
法多羅の三十八品のまじきありきありきありきありきありき

菩提心の心と言ふは此の心は経よりありて
ちよ佛のちよみちよとあらんをり。菩提心蓮多を
五逆罪の人を救ふといふ所の言は天子かまをり
なりぬ又いふ所の心ハ八業の終末文殊の教化より
耶身成佛いふとて女を多しとて男もなること
は男をくも女をくもさんむりさなり

勅持心の心

大納言齋信

○勅持心の心は経よりありて
は品の心も百八子の声聞ありて佛の滅後乃
は慈悲の心ありて経よりありてさむむ
八十億那由他の菩薩とてさむむ慈悲の體用と
さむむさむりの心ありてさむむの心ありて

さむむと勅持の心は、法の所ありてさむむ
にのいひさむの心ありて後世にさむむて
は法をさむむとてさむむの心ありて
さむむとて勅持の心ありてさむむの心あり
さむむとて勅持の心ありてさむむの心あり

五月より雲林院の言提後さむむとて
ゆりけり 肥後

○雲林院の言提後さむむとて
五月より雲林院の言提後さむむとて
ゆりけり

慈園

○修りくもろく一善法よむきしめてのけや善法はのり山
善法は善法なりと中の中を生きたり一のり
これに随縁をあらせりて善法は生きたりゆかり
て化後一ありこれと志せり一善法よむと
てしるあり

同

○ともありきこれ白濁よれといひては先づ結するやう思
是の明通はほしくも悪業なるとも佛法の義理成
難変一くひりて又悪法の心はくも失せんと
なけりて悪業もまたゆるかり方のもりよはありま
ともも悪業を成する心はくもゆるかりて
清くしてふねのり也因の字なり又ありとて

むらぬこふもよめるん

同

○極楽の心はつむじむじのあめと志せり一あり
はろく浄土宗の他力の本願は善くも淨土極楽
よらんふありす自力の親心をこころて安心成
佛のたのひと極楽なり一これと極楽の
のりつむじ一これと極楽なり一これと極楽なり
と云心はくも淨土の善法をこころと極楽なり
ありあり一のあめと志せり一あり
とろく善のひれと志せり一あり
とろく善なりと志せり一ありと云是也人氣の毎日
清くするなり

親心如月猶若在輕霧中のあつらひ状

権信云云亂

○我分我晴やうぬ秋落小洞のふこゆりありの月
親心の猶文と云るを可為あり心を親心と云積
本心也是と親まされぬ如霧の中はも心心のまを
霧とはは如悩とつあなり

家よ百まであつらひける雨十畝の心をよんゆり
けり小極之の心を

権政殿

○奥のいひりうと母ははらりほと考るたを風よりあつらひ
海はそは形は仏のそりりく二十二相をそくそり
花はそをそくそく在中のむらりさるるとはゆり

ち八独りそせはゆりはそりりあつらひる
二道ハゆりそ小あつらひるはそりり人そ十畝ハ地獄
餓鬼畜生修羅人男天男声聞縁是そ十塵
併思そ十畝也
心經のあつらひる

小侍候

○色小の海一はあつらひるはそりりあつらひるはそりり
色昂是空の文乃句面とそりりあつらひるはそりり
権政大政大良女百首あつらひるはそりり十樂の心とそりりあつらひる
はそりりあつらひる

寂蓮

○葉のやゆりはそりりあつらひるはそりりあつらひるはそりり

新治註 四 五七

極楽は往生する所の極楽は来迎喜樂よと云ふ
是樂雲よひられゆると云ふははらけよと云ふは
よりの極楽のひらけは凡よと云ふは凡のあはれ
うと云ふをえらよと云ふは凡のあはれなりは
そは極土苦域の男と云ふありて心よと云ふ也
蓮華初用樂 同

○まきやこの世のほれまきなる花のさばうのほれ
下界下生のほれ生人の蓮華未定して極楽八地
地十二大地をくくたうと云ふはひらけと云ふは
こころの浮世のわらわらと云ふはありてなり
快樂不退樂 同

○まきやこの世のほれまきなる花のさばうのほれ

細云快樂無極長と道德合明永拔生死根
木と云ふは極楽のたのしみ力感義のささめと
まきやこの世のほれまきなる花のさばうのほれ
まきやこの世のほれまきなる花のさばうのほれ

引接結縁樂 同

○まきやこの世のほれまきなる花のさばうのほれ
細云安樂園清淨常轉を始一念及一時利
益諸群生と云ふは極樂よはせしめては縁ありて生
をまきやこの世のほれまきなる花のさばうのほれ
法華經廿八品より云ふは方便品唯有一
念法のゆえ 慈園

○まきやこの世のほれまきなる花のさばうのほれ

世品の心く先序品のとれは生まの心と一為より
らくは身持まをたれあり也ま一業のこころい
と一まの志ま佛ま也まけりる情ま生ま
本ま國ま六まいまつまをまるまとまるまり

化城喻品 化作大城郭同

○思ふ世の中と出るとさうたすを有るなり
化城喻品ははるるは作大城郭と云ふ也た人の
旅人をつましくとらふも旅人のつれづれを
五百由旬とよめる人さ山路の半にありのたす
りくはるるたれた也と云ふは徳の旅人た
つれづれをつましくつれた也又云ふとらりのたす
今二百由旬とらりゆくとたははるる

たれとるは法のまひ人易く今二百六十由旬を
よりくまの城はまよりたれたをみりひ
法くま生たをいしくとらるる漢果をたす
多ひくま及大業のはた法をまきく
成佛をたせさ結るる人のとられり
けりやとらるる實もを宿ありとらり
かまもまらま又まいありのたありと
ふたつとらるる海也
分別功德品 或住不退地

○徳の山まきくはのみちとてかたぬ有るは
不退地は位とらるとは法花のたま量不
功德によりて法生たの位は位とらるる

去る方より不遠地と云ふを其れを法に於てく
回つてぬ富より人々をさすことばは下ある也

善明品 心念不空過 同

○ちまたくじりて死すと云り 小教の如きいじりしは
野志は念くくをさすれをといひしは
へくじりて死すと云り
有るぬれんは果の業のこゆると云り
木諸常 不満足と云るを

崇徳院

○ごまへくは牙ふさむかみさむる
は都阿合短のふもやぶるのつひの
先照る山
定家

○初月すきつていぢりめをばさ
善教は先照る山に照る地次照
はるをさすはるのまはるはあ
る也

家より百首よりありあり
入道茶園白太政大臣

○まきと心の也は法す
五智と云は欲をばよりぬまは
ちり入る又職ありは五縁より
又五音と云ふもより根本をば
と云也妙親教を智と云はるを
なませと云ふ心のまをさす

えりといふり

勅持品

正三位経家

○はすそくし世をあはれむ世はゆるしふと世を思ふ人
法のしるしを独りたりしり世にををもとめんと
去心とまがゆらむとくもくもく人てふ位とくめ
をふりといひ

法師品

加力杖瓦石

念佛故應慈のよきなり

寐蓮

○物かたは世打ぬはあせぬうき世をわのあふ版なり
世のよ方にいれおふは法苑珠林をうじは信ん
魚人わくこみみくが杖瓦石をくもくもく人て
け法師をきりたてくもくもく世のよよゆは人の

そこのまにほくはあれたらあしむるか
めんじんきんしとくを極善のチ結つた文也南と
あふよあせぬうき世をわのあふ版なり
へりありあしむるあしむる世の心ゆる人といひあり

五百弟子品

内秘菩薩のん紙

慈園

ひちりのあしむるあしむる世の心ゆる人といひあり
富樓那尊者は仏の不可あらそひはるる菩薩
のりとねかよひはあしむるあしむる世の心ゆる人
をうきあしむるあしむる世の心ゆる人といひあり
はくしむるあしむるあしむる世の心ゆる人といひあり
力を理を悟りて淨圓と成りては花にけり

みまは内秘菩薩の如くとも此之大業因の
月のありけりともあり

二乗但空 智如萤火 寂蓮

○みまの量りて成る人びくひりて出りたるの
は文の徑と云ふなりと云ふ心二乗と云
多縁也二乗の何と小業也後法に云ふなり
悟り也先と信を云ふ也は智を大業と云ふ
われと信を小業を云ふなりと云ふなり

菩薩清凉月 遊於畢竟空

同

○雲を以てて云ふは世の中と云ふ月が
け文の心の菩薩の悟りて月よと云ふ

一 舞りてて云ふは世の業成りてと云ふなり

慧を以てて云ふは世也

梅檀香風 悦可衆心 同

○梅檀よと云ふは世也と云ふは世の
是は花を以てて云ふは世の
礼を以てて云ふは世の
と云ふは世の
と云ふは世の
と云ふは世の

他是教已後至他国 同

○と云ふは世也と云ふは世の
是は花を以てて云ふは世の
礼を以てて云ふは世の
と云ふは世の
と云ふは世の
と云ふは世の

のふと持しつらふびふと親のふれふ毒業を
くくくく毒は腫つるを親他よりゆりあく
ふく毒業を親命してふくくくふく毒業を
あく入つらふちやのふくくくくく毒業を
ふくくくくくく親業をふくくくくくくくく
他國へつてふくくくくくくくくくくくく
たりとつてふくくくくくくくくくくくく
業とのふくくくくくくくくくくくくく
憎むゆへに親の毒業あつた也佛の呪ふと信せ
てふくくくくくくくくくくくくくくくく
怪をゆへに親の毒業あつた也佛の呪ふと信せ
てふくくくくくくくくくくくくくくくく
はるを親あつた也佛の呪ふと信せ

園の毒業のやむをり本とくくく他國へつて心也
法の毒業のやむをり本とくくく他國へつて心也
此の毒業のやむをり本とくくく他國へつて心也

此の毒業のやむをり本とくくく他國へつて心也

○まふくくくくくくくくくくくくくくくく
親の文の毒業のやむをり本とくくく他國へつて心也
くくくくくくくくくくくくくくくくくく
はるを親あつた也佛の呪ふと信せ
慈嘆吻母 痛懲本群 素是法師
くくくくくくくくくくくくくくくくくく
是を親あつた也佛の呪ふと信せ
奇恩入るる 森然法師

○そび子いつまのせいら知る存ひて思たりとて人よきと見
 け難く由家とらつ時の文也世とてむい生能をくれ
 まく惜むひく共通をひくもまののりよ
 かりくそのせり人よきこののりよ
 けしむれ人よきれんとも心たりの年一息とい
 難く文或母素みかしくを捨る也感おとくられ
 年也母を捨るい事を報せそののちとねらり
 とて人よきらまんとたり

合會有別離

源孝廣

○連みくともひよわゆる白雲ののりは世ののり
 難の文何の難文とてくきあひくきあひあり相
 難者いふ終のありいとあり

聞名欲往生

兼名は作

○あよきくあるとておのねまうんものなありつるよ
 け難く去と難終のよりとて若かりハそつとて作
 え心也意依のりもは改の清國とねんを佛を
 りまよけるありあり

心徳意慕湯伴於佛

○おひその面影のしりきふあまきよよのそ月
 量品の文也常住不滅の如来亦生とてらひ
 うひりるよはらふ入滅をあらくも入成生は
 仏とていふもゆいよはらふくくも生とて
 ころせはあらくもよめらるあり
 十戒のよはらけるよ不教生戒

○わらうのむねをいひていふなりけりとのむねはゆきゆき

不倫盗戒

○浮系に二系ありた強これ思ふべきをそなたらう

自あこふはぬまをなひひらうのむねは藤林白

波うて二人あうう山田をうまうて自あこふ

しうふをうまをえううま

不邪嫁戒

○はらわはたはらうとのむねをうううううう

いふうううううのむねをうううううう

不沽酒戒

○花のむねをうううううううううううう

ううのむねをうううううううううううう

いふうううううううううううう

入道西園自家は十ねえいふううううう

如是観

二條院後波

○ううをううううのむねをうううううう

法華經方便説は十ねえいふううううう

ううをううううのむねをうううううう

待賢院中納言は十ねえいふううううう

せうをうう小序品廣度請衆生其數無有量の

うう

後成

○ううへうううううううううううう

新古今言

二

廣太事也よんせりて人となりてひのま耶こころ
なり也

数福門院は極楽六所徳の後よかりて人こそ奇
なりて人こそ奇なりけりふとん信大衆法をこそ
て誦教を聴けりせん

○今う先入日とてくもくもあへて休後の出國の女を
あはきこころもくもくもく

隠いりて泣のよき金の岸にすするをく

○今一の尾上の清よにけりてふき打あまのあつきの夢
その心しりてかたなり

五百弟子品の心を 信和源伝

○去りて夜のしとせりてうとあつたけりてをりて

秘製新珠の心也まよはれりてる氣あり

維摩經十卷中よは身也友といふ心也

赤染清つ

○善やゆめゆめや友とてわかれりてあつてはくこめむとせん
善と云を現とてをるも善也とせん善現とてか
りい善也いゆのゆめりてはくこめむとせん
三月十五日善也こよは現力も猶う許りてあつて

相摸

○善よりをきつて煙のけりて善なりとてあつてはくこめむとせん
きつてのけりてははれぬ入城一宿を権僧の勤に
なかりとてなりてをりてはくこめむとせん
ののけりてとてはくこめむとせん

懐をどうんとわらふは後にはなつかうと

西

伊勢太輔

○おまのいよと海よくまぬあのみ思ひ入目のことやあまの
まよひいよとさばは仏涅槃の目されとあまのいよと
の影をあらめくと西の影のあまのいよとあり
人のあまのいよとけり及結海神傳書一けるあまの
安樂世界のあまのいよとあり

西の人

○昔は月のみりやあまのいよとあまのいよとあまのいよと
あまのいよとあまのいよとあまのいよとあまのいよと
あまのいよとあまのいよとあまのいよとあまのいよと
あまのいよとあまのいよとあまのいよとあまのいよと
あまのいよとあまのいよとあまのいよとあまのいよと

観心なよらんあまのいよと

西の法師

○あまのいよとあまのいよとあまのいよとあまのいよと
あまのいよとあまのいよとあまのいよとあまのいよと
あまのいよとあまのいよとあまのいよとあまのいよと
あまのいよとあまのいよとあまのいよとあまのいよと
あまのいよとあまのいよとあまのいよとあまのいよと

新古今集註終

此物書連之體定連之說少之又加了
篇少者買一冊也不可他已之故筆跡
今之正體也

平常錄 在判

宣一冊以東野列自等本之寫亦可
錄中者也

月日 宗幸 在判

此集之抄出以去之奧書中書寫之
可謂秘苑而并為不發之海鏡也

仍年耳所聞之義等以加之 於常錄抄本
以東加九点
分而為上下路以之其恐不記憶也
倘尚尚是也 近諸
大周 三光院殿 三条
西前
府言之語說速昇詞者也 青
以紫
外已
深可納也 底
之
所

慶長身二季陽下旬 丹山隱士玄旨判

竹五卷四

六八卷

丹山隱士翁古今和歌集註者普世間
流布也雖然擇古文字不詳今又
卷頭現歌人景圖分句負數令增補
為懷中之書唯奇此道觀見而已

寶貞永八年正月吉日

大坂高麗揚西大屋宗所

沖倉平右衛門板

